

アトリエ 琉游舎 だより 156号

アトリエ琉游舎 ryuyusha.com/

2023年7月5日発行

琉游舎for healing <https://toi101izuru.wixsite.com/mysite-3>

七夕祭るこそなまめかしけれ やうやう夜寒になるほど

徒然草



- 七夕の時期は梅雨の終盤にあたり、集中豪雨などもたびたび起こる時期で、殆ど夜空を楽しむことができません。七夕を過ぎてしばらくすると梅雨明け、暑い夏がやってきます。ところが、鎌倉時代の随筆「徒然草」の一節には「七夕を祭るのは、まことに優雅なものである。次第に夜も寒くなるころ」と書かれています。続いて「雁鳴きてくるころ、萩の下葉色づくほど、早稲田刈干など、とり集めたる事は、秋のみぞ多かる。」と秋にはあれこれと趣のあることが多いと続きます。七夕は秋の行事、秋の季語だったのです。
- 私たちは新暦の巡りの中で生活していますが、昔から続く暦に関わる行事は旧暦をもとにしているので、必然的に実際の気候との乖離が出てきます。江戸時代以前の文学作品を読むと、書かれている節気や時候は現実の新暦で実感する気候とかけ離れているため、感覚的にすんなりと理解できないことが多いようです。徒然草に書かれているような「七夕」を秋のはじめを感じる節句の日（季節の節目）とは実感のできない、現在の七夕の日です。
- 「七夕や秋を定むる初めの夜」芭蕉の句です。文字通り七夕をこの日から秋となる初めの夜と詠んでいます。江戸時代までは七夕をこれから秋がやって来る節目の日。現代では七夕が終るともう少しの我慢で梅雨が明け、本格的な夏がやって来る日。となります。
- 旧暦の暦のあれこれ、農作業の目安となる時期を見定め重要な日を共有し知らしめる役割がありました。勝手に作ることは許されず、暦は「時を支配する者」として権力者が作成し公布するものです。明治から日本は太陽暦のグレゴリオ暦に改暦しました。農事を基盤としていた日本人は、それから頼るべき生活の柱＝暦を見失ってはいないでしょうか。
- 新暦の七夕を過ぎると蒸し暑い寝苦しい夜がしばらくは続くことでしょう。人も自然も暑さで活力が鈍るときは無理をせず、実りの秋に向けて力を温存する時期かも知れません。恵みの太陽も限度を超えると凶器になります。今年の夏の太陽は優しいといいですね。

7・8月スケジュール

月 火 水

10	11	12	6 映画会 お休み	7	8	9 写経会 13時半から
11 読書会 13時半から	12	13 映画会 13時半から	14	15	16	
17	18	19	20 映画会 お休み	21	22	23
24	25 読書会 13時半から	26	27 映画会 13時半から	28	29	30
31	8月1日	2	3 映画会 お休み	4	5	6

読書会

7月11日

7月25日

(火) 13時半

写経会

7月9日 (火)

13時半

映画会

変則日程ですが
が開催します

まだ子供が小さかった頃、高速道路移動で一番気を遣わなければならないことはトイレ休憩を取るタイミングだったと思います。子供は渋滞やタイムスケジュールに関係なくトイレに行きたくなったら我慢ができなくなります。同じように眠気も我慢できないようで、今まで活発に動き回っていた子供が突然エネルギーが切れたようにぱたっと静かになり、あっという間に寝息を立てています。今は夫婦二人で移動することが殆どなので、二人のペースで休憩場所も時間も状況に合わせて選ぶことができます。今の瞬間の要求を先のことを見通して処理する能力が長く生きていく内に自然と身についたものか、我慢をなんとも思わなくなったのか、何事も子供にとっては今この瞬間が一番大切なので、子供は我慢を望まない生き物なのでしょう。

私は「我慢」という言葉がいつから「耐え忍ぶこと。辛抱」という意味になり美德のひとつとなったかを知らないのですが、この中国語が移入されたときは、仏語（経文）として入ってきました。経文に書かれている「我慢」の意味は「我に執着しよりどころとする心から、自分を偉いとおごり、他を侮ること。」です。現在の意味と正反対の使われ方です。仏教の基本は「諸法無我」ですから、全ての現象に「我は無い」と観ることです。無い我をあるとみて私の判断をよりどころとしそれに驕ることが「我慢」です。お釈迦様の教えに従えば我慢は「善」ではなく「悪」です。我慢から執着や怒りや無知の「三毒」が引き起こされわたしたちに「苦」をもたらします。仏教は「我慢」から解放されて自由になることを希求する宗教なのです。

もし我慢のきかない子供をわがままと呼びそれを社会的道徳的「悪」と規定していたものから、大人に成長する過程で我慢の経験をくぐり抜け協調性と判断力を身につけることが我慢の成果である「善」と呼ばれるならば、私たちが社会性を身につけ生きるということは、我慢からの解放という仏教の理念に反して我慢を尊び推奨することで、「苦」を増幅させる不幸な社会を作り出していることにならないかという疑問が湧いてきます。これは「我慢」の意味が全く逆の意味に転化したことと大きな関係があると思われます。

「我慢」は宗教的な視点から見れば「悪」です。私の我慢は私に苦しみをもたらす原因となるからです。私自身の苦からの解放（悟り）の実現のためには我慢から解放された自由な私（無我）の獲得が絶対的な条件だからです。しかしそれは現実の社会生活、人との関係性の中では実現不可能であることは自明のことです。私の我慢からの解放が逆に他者に我慢を強いることになるという宗教的二律背反が起こってしまうからです。だからお釈迦様は出家をし、社会との関係性を絶ちました。しかしそれでも仏（覚者）となったお釈迦様以外の出家者は無我を獲得するためには自分の肉体の消滅を待たなければなりません。私たちは生きていく限り無我にはなれないという現実からは逃れられないのです。親鸞聖人は「私」を徹底的に見つめることで、「罪悪深重」「煩惱熾盛」という人間の逃れようのない「悪」の姿を明らかにしました。「私が生きる」ことは我慢のまま生きること、「悪」を身に纏い生き続けることだと悟ったのです。そして

「私」の全存在を阿弥陀如来にお預けすること（他力）で宗教的な自由の境地（我慢からの解放）を得たのです。ここに社会的道徳的な悪の自覚を経た「我慢」は宗教的な浄化を受けることが可能となりました。現実社会の中で宗教的見地から見た「我慢＝悪」の我が身を阿弥陀如来に預けることで宗教的善に浄化された我が現身は、他力の身のままに（無我）社会生活の中で「我慢＝堪え忍ぶ」生活を続けるのです。「宗教的な悪」が現世の美德へ、「社会的な善」へと転化していったのです。「罪悪深重」「煩惱熾盛」の罪の自覚をもった我が身を阿弥陀如来の他力に委ねることで、一旦「我慢＝宗教悪」の罪は浄化を受け、その他力の身のままに社会生活を営むことで「我慢＝社会善」の転化が実現したのです。その様に考えなければ親鸞聖人の「善人なおもて往生をとぐ、況んや悪人をや」の言葉もただの宗教的詭弁にしか聞こえないはずで

私は親鸞聖人のこの有名な「悪人正機説」を決して宗教的詭弁と観ることはできません。お釈迦様の教えは「善対悪」のような二元対立の考えを持たないからです。「諸法無我・諸行無常」の教えは世の中のすべての現象は常に変化し生滅して、永久不変なものはないということです。つまり絶対的な「善」も「悪」もないという教えです。「善悪不二」です。善も悪も二つのものではなく、あらゆる現象をありのままに観ることに帰着するという、ひとしく真如のあらわれであるということです。「大悪」の自覚を強く持つ者ほど、お釈迦様の慈悲の喜びを大きく実感できるという、宗教的パラドックスがここに成立するのです。そしてその喜びを実感した者、つまり大なる仏の慈悲を信じる者にはこれはパラドックスではなく、宗教的な絶対善として仏の救済を真っ先に受ける者となり得るのです。それが「悪人正機説」であると私は理解しています。日蓮聖人も大悪は大善を引き出すためには必要不可欠だと考えていました。「日蓮が仏にならん第一のかたうど（方人）は景信、法師には良観・道隆・道阿弥陀仏、平の左衛門の尉・守殿ましまさずんば、いかでか法華経の行者とはなるべきと悦ぶ。（種種御振舞御書）」ここにあげられた名前は当時の日蓮の敵対者や迫害者たちです。日蓮は彼らがいたからこそ自分は法華経の行者たる自覚を得、仏の大善に預かることができたと言っているのです。彼は仏となるための大敵（大悪）を一番の方人（味方）、つまり大善であると述べています。大悪と大善が不二であることを物語っているのです。これは日蓮の悪人正機説です。

私は「信」を社会の中でどう実践して行くかを考えるにあたり、常にお釈迦様の教え 琉游舎：戸井 出琉・恭子の原点に帰るようにしています。すると一般的には正反対の考えと思われて 問い合わせ：0287-53-7848 08033508152 いる日蓮と親鸞の仏法は全く同じことを言っていることに気づきます。こ 矢板市大槻2319-17コリーナ矢板C-850 のあたりまえのことを我慢することなく語り続けなければならないと考えています。メール：toi101izuru@outlook.jp